

なぜ、「かかりつけ医」がいて
「かかりつけ薬剤師」が
いないのか。

公益社団法人全国自治体病院協議会会長
／赤穂市民病院名誉院長

邊見 公雄

取材／武田 宏
文／及川 佐知枝
撮影／片岡 正一郎



MY OPINION

—明日の薬剤師へ—

「患者さんにかかりつけ医を聞くと、たいいていの方は答えられる。けれども『かかりつけ薬局はどこですか』と問うと、ほとんどの人が答えられません。保険薬局のいちばんの弱点でしょう」

この言葉は、取材を終えて数時間後、「いちばん言わねばならない点に言及していなかったかもしれない」と、公益社団法人全国自治体病院協議会会長で赤穂市民病院名誉院長の邊見公雄氏が、編集部にかけてきた電話で語ったものである。

薬剤師へのメッセージを——我々の取材の趣旨を理解し東京で取材を受けた後、所用で京都へ向かう新幹線の中で取材の内容を反芻し、慌てて電話をしたと言う。まったく

調剤に熱心になりすぎていたのではないかと分析する。「私が小さいとき、身近には医療にかかわる人が大勢いました。今では見かけなくなりましたが、当時、薬剤師は薬を薬鉢ですり、天秤に乗せ、メスシリンダーに入れて反応を見たり——。子ども心にも面白そうだった。

けれども、薬剤師は調剤ばかりしていて、結局のところ薬局の番人、薬剤倉庫の番人のような存在となり、ベッドサイドには行かなくなってしまう。ベッドサイドに行くか、行かないかの差が、医師や看護師と薬剤師の決定的な差になって、各々の立ち位置を変える要因になったのだと感じます。

ほんの昔は、あたかも医師のようにして活躍していた薬

薬剤師は調剤ばかりしていて、 薬剤倉庫の番人のような存在となり、 ベッドサイドには行かなくなった。

ありがたく、薬剤師に対する彼の期待の大きさを実感させられた。

「この先生が、あるいはこの薬局がかりつけど、患者さんたちが言えるような時代をつくってもらいたい。街の薬剤師さんへのお願いです」

かつて、薬を駆使して病をいやす者を薬師と呼び、それは人々にとって現代の医師と同値であった。しかし、いつしか患者を治療する医師と薬を調合する薬剤師とに分業され、医師は表舞台に、薬剤師は裏方にまわる。



何故、薬剤師は表に出て行かなかったのか。邊見氏は、

薬剤師ですが、患者と接しなくなるにつれ、看護師よりも目立たなくなっていました」



邊見氏は、薬剤師に向ける大いなる期待への根拠を3つ示してくれた。

「ひとつ目は、最近、看護師副院長のポジションが増えていますが、なぜ、薬剤師副院長がほとんど言われないのか不思議です。薬剤師は、医療界では医師と並ぶ専門職。看護師よりもしっかりした、薬を含めた医療全般の知識を持つ薬剤師が、医師のベストパートナーになりえる可能性は高く、また、薬の価格が病院の経営に及ぼす影響は決して



小さくありません。

さらに2つ目には、医療での大きな課題のひとつに医療事故防止があります。医療安全においては薬剤師がいちばんのキーパーソンでしょう。医療事故は、薬にまつわるものが最多なので。

たとえば、よく大きな死亡事故につながるのは、静脈注射にかかる薬剤の血管内投与です。誤薬もあるし、投与スピード、投与経路、いろいろな意味で薬は、つまり薬剤師の役割は、医療安全においてきわめて大事です。

最後の3つ目として、チーム医療のキーパーソンにも薬剤師が適任だと思っています。医師は忙しすぎて、なかなか真の意味でリーダーにはなれない。指示や顧問的なアド

わっていかないのではないでしょうか。

とは言うものの、現状では臨床の場に看護師はいるが、薬剤師はいない。ちよっとおかしいですね。おかしいのはたいへん能力が高い薬剤師の地位が低い点でも同様です」
 邊見氏のすばらしいのは、「おかしい」と思うだけでなく、「おかしい」を是正するための行動に出る点。有言無実行ではなく、有言実行の人なのだ。全国自治体病院協議会の会報誌に「看護師より薬剤師が軽視されている状況は改善されるべき」との抗議文を投稿し、彼の見事なまでに歯に衣着せない主張が掲載にいたった。

「看護師より薬剤師のほうが、初任給、給与が安いなんて、どう考えても変です。薬剤師は大学を出ているけれど、看

薬剤師関連の学会に行き シンポジストとして発言するときに、 決まって言うのが「薬の鉄人をめざせ」。

バイスはできて、特に外科医などは手術室から出られない日々がつづくので、中心人物になるのは無理でしょう」



「薬あるところに薬剤師あり」——1999～2006年まで日本病院薬剤師会会長を務め、薬学教育6年制の実現に尽力した薬剤師であり薬学者でもある全田浩氏の言葉に、邊見氏はシヨックにも似た感銘を受けたと話す。

「私は病棟だけでなく、手術室にもICUにも在宅医療にも、薬のあるところには薬剤師を配置しなければいけないと確信しています。そうしないと、技術が高度化する一方で、在宅医療が拡大していくこれからの医療は、うまくま

護師も最近は大卒が増えてきていると言っても、ほとんどは専門学校の卒業生です。医療に関する基本的な知識の保有量が決定的に違うにもかかわらず、薬学部が6年制になってもまだ看護師のほうが給与が高いのは、なかなか納得できません。

私が名誉院長を務める赤穂市民病院は公立病院ですから国が耳を傾け、看護師より薬剤師の給与が高くなるような制度改革をしてくれないと勝手に薬剤師の給与を上げるのは不可能。薬剤師の地位向上のために誰かが抗議をしなれば——。『週刊社会保障』の『ひろば』欄でも、同様の内容の原稿を書いて載せていただきました」

医療関係者であれば、彼の抗議内容がどれほどリスクを

含んだものを即座に理解できるだろう。看護師を敵にまわすような発言は、看護師の絶対数の多さゆえに、タブーだと考える医療関係者は多く、できるだけ避けて通ろうとする。

しかし、邊見氏の発言はよどまずつづいた。



邊見氏が、薬剤師の集まりや講演会に呼ばれたり、薬剤師関連の学会に行きシンポジストとして発言するときに、決まって言うのが「薬の鉄人をめざせ」。

『料理の鉄人』というタイトルの料理番組が以前、一大ムーブメントを引き起こしました。リアルタイムに料理をつ

ている姿が見えない薬剤師に対しては、誰も『たいへんだな』とは思わない。薬剤師がベッドサイドに行き患者さんに薬効を確認するような病棟業務、あるいは外来での立ち会いは、『見える化』の側面から見てきわめて意義深いでしょう」



ところで、赤穂市民病院のある兵庫県には、1998年から中学2年生の生徒たちが1週間、教室を離れ、自分が将来働きたい職場などに行き、実習する「トライやる・ウィーク」と称する学習期間がある。なんと同制度の設置には、邊見氏が深くかかわっているという。

「どうせ同じ薬をもらうのだから、 どの薬剤師からもらっても同じ」との 患者の考えを払拭してほしい。

くるシェフの真剣な姿に、多くの国民は目を釘づけにされました。皆『料理ってすごいな』と思ったでしょう。私も『これはひょっとしたら外科医よりもすごいぞ』と思いました（笑）。

やはり大事なのは『見える化』。薬局や倉庫でだけでなく働いても患者さんにはわからない。薬剤師は薬鉢もメスシリンダーも、ぜんぶカウンターに出きて、調剤を見せたらどうでしょう。そして、『料理の鉄人』ならぬ『薬の鉄人』である点を示すのです。

看護師は患者さんのそばにいて働いているのが見える。廊下を小走りに急いでいるのを見ると、『ああ、忙しいのだな。やっぱり看護師さんはいへんだ』と思うが、働い

「私は三現主義。現場に出て、現物を見て、現実的に考える。教育にも三現主義が重要だと考え、導入当時の貝原俊民知事に、子どもたちに働く現場を見る、社会を見る教育をしてほしいと進言していました」。

『トライやる・ウィーク』で医療現場を見学に来た子どもたちは、最初は、医師や看護師になりたいと思っていた子がほとんどですが、1週間も後半になると、薬剤師になりたいという子が出てくる。日ごろは薬剤師が見えておらずわからないのですが、医療現場の中に入ってみたら、すばらしい仕事だと魅力を感じるのでしょう。

薬剤師の仕事はすばらしい。ぜひ、皆さんには自信を持って自らの仕事を社会にアピールしてほしいですね」

◆ ◆ ◆
全国の保険薬局の様子を見て、医薬分業は失敗だったとの説も多々ある。

当初、医薬分業によって保険薬局の薬剤師には、従来、病院薬剤師が務めていた業務の継承が求められたが、多くの保険薬局は医師の処方せんどおり正確に薬剤を渡すことばかりに注力し、患者とのコミュニケーション、医師の処方に対する疑問出しは、よほどの事態でなければ行われずじまい。

医薬分業で、保険薬局の薬剤師は国民に対して利益を与えているのか——なかなかイエスとはいえないところがある。

「だからと言って、院内処方に戻せというのは暴論。時代を逆走するようなものです。」

病院薬剤師が病棟業務やチーム医療で貢献し、評価されるようになるには、院外処方が大前提にあります。したがって、院外処方を推進する方向には逆風より追い風のほうが強いと考えられます。

保険薬局の薬剤師には、患者さんの話をもう少し聞いてあげ、病院薬剤師が忙しくてできなかった薬の副作用や効き目、飲み方などのきめ細かい説明をするよう、心がけてほしいですね。

せっかく院外処方になったのですから、かかりつけ薬局の機能を果たそうとの意欲も、もう少し持っていた方がいいと思います。薬のことはあの薬局、あの薬剤師の先生と言うふうにね。

それには『薬のことは私にお任せください』と患者さんに言えなければなりません。『どうせ同じ薬なのだから、どの薬剤師からもらっても同じ』との患者さんの考えを払拭するのはです。ぜひ、『薬の鉄人』になってください」

赤穂市民病院の病院長を長年にわたって務め、今は全国自治体病院協議会会長の地位にある人物が薬剤師にこれほど熱い応援歌を贈り、薬剤師の地位向上に尽力する事実は驚かされる。まさに邊見氏は、薬剤師の味方だ。

彼の期待に応えようとせず、ただ医師に言われるままに薬を調剤しつづけるなら、薬剤師は永遠に薬剤倉庫の番人ではないだろう。



PROFILE

(へんみ・きみお)

- 1968年 京都大学医学部卒業
京都大学医学部附属病院研修医
- 1970年 大和高田市立病院外科医員
- 1972年 京都大学医学部附属病院第二外科医員
- 1974年 京都通信病院外科医員(京都大学医学部研究生)
- 1978年 赤穂市民病院外科医長
- 1987年 赤穂市民病院病院長
- 2009年 赤穂市民病院名誉院長

中央社会保険医療協議会委員(2005～2011年)
 全国自治体病院協議会会長
 全国公私病院連盟副会長
 京都大学医学部臨床教授
 京都大学医学部附属病院運営顧問会議委員
 京都府公立大学法人経営審議会外部委員